

---

# 氷の海

雨宮雨彦

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

氷の海

### 【コード】

N9762C

### 【作者名】

雨宮雨彦

### 【あらすじ】

トナカイ号は、世界最大の旅客潜水艦だった。途中で一度も浮上することなく、北極の氷の下を横断することができるのだ。だがその航海がこういう結果に終わるとは、姉も私も想像もしていないことだった。

『トナカイ号』は、世界最初の旅客用潜水艦だった。全長数百メートルある巨大な船で、120人の乗客を乗せてイギリスの港を出港し、北極海にもぐり、氷の下を何千キロもくぐりぬけ、たった4日でカナダに達してしまうのだ。

そういう船だから、姉と二人でカナダへ旅行することが決まったとき、新しいものの好きの私が、この船を利用することを主張しないはずがなかったのだ。

だが姉は嫌がり、なかなか首を縦に振らなかった。私は腹を立て、三日間一言も口をきいてやらなかった。とうとう姉は折れた。だからあの日、私たちはあの棧橋に立つことになったのだ。

横付けされている巨大な船体を目にして、姉はまゆをひそめた。窓一つない中に閉じ込められるのが不愉快だったのかもしれない。だが私は一目見ただけで興奮し、息もできないほどだった。

船体はソーセイジのような形で、明るい灰色に塗られ、長く広く海を押さえつけている。波ですら、こっそり遠慮して船腹を洗っているという感じだ。船尾からは、羽根の一枚一枚がスクールバスほどもあるスクリューがぐいと突き出している。これほど大きな潜水艦はかつて存在したことがないし、今後も作られることはないかもしれない。

## 氷の海

デッキの上で、艦長はもう待つていた。乗客一人一人を温かく迎え、握手をした。決して若くはないが、制服を着てきりりとした姿を見て、姉がほおを赤くするのがわかった。海軍を退役したばかり

の人物で、戦争中にも潜水艦に乗り、敵艦隊をきりきり舞いさせたのだそうだ。そういう話は私も聞いていたから、会うことができても光栄な気がした。

私たちは船内へ案内された。鉄の長い階段を降りてゆくと、かすかなブンブンという音が聞こえてくるようになった。姉は再びまゆをひそめたが、「原子炉の音だよ」と艦長から教えられ、私はまたわくわくした。

出港のときが来て、トナカイ号は港を離れ、ハッチが閉じられ、潜水が始まった。だが非常にゆっくりとしたものだったから、船内においてもほとんど何も感じられなかった。あれほど巨大な船体は、波ですら揺り動かすことができないのだろう。原子炉の音がわずかに高くなったことはわかったが、本当にそれだけで、私は少しがっかりした。あまりにも揺れないので、船に乗っているという感じがしないのだ。

潜水艦なのだから窓は一つもなく、風景を楽しむことはできないが、そのぶん船内の設備は充実していた。ラウンジやバーや劇場があり、映画を上映していないときには、専属の劇団が客たちの目を楽しませていた。小さなものだがプールやテニスコートもあり、私たちは時々出かけた。二日ほどたつうちには姉も、船内での生活を楽しみ始めたようだった。

## 氷の海

トナカイ号は今、北極の分厚い氷の下、百メートルのところを航行していた。艦長が話してくれたことだが、北極の氷は板のように平らで、それこそ無限に続く天井のように、どこまでも青白く伸びているそうだった。ベッドに入ったときなど私は天井を見上げ、このはるか上に氷の平原があり、白熊やペンギンたちが遊んでいるのだろうかと思ったりした。

(北極にはペンギンなどいないということを私は知らなかったのだ)

だがこの航海も、いつまでも平穩というわけにはいかなかった。ある夜の真夜中すぎに、名を呼ばれて私はそつと起こされたのだ。

姉の声だとすぐにわかった。目を開くと寢室のドアが開いていて、居間の明かりがうつすらと差し込んで、姉が顔をのぞかせていた。

「何なの、姉さん」私は口を開いた。

「ジュリエット、ちよつと起きてくれる？」

姉の声がいつもより固い気がして、ちらりと不安になったが、私は毛布をはねのけた。カーディガンを着込んで、寢室を出た。時計に目を走らせると、午前1時を過ぎたところだった。

驚いたことに、居間にいるのは姉だけではなかった。艦長までいたのだ。いつものとおり制服姿だったが、ひじや肩のあたりにしわが寄り、あちこちに黒い油のシミまでついていることに気がついた。何があったのだろうかという気がした。

「起こして悪かったね、ジュリエット」

艦長は口を開いた。帽子を脱いで、わきのテーブルに置いた。初めて気がついたのだが、艦長の頭のとつぺんは丸くはげていた。

腰かけるようにと艦長が合図をしたので、私はソファアに座った。姉が隣にやってきて、私の手を取った。

「ジュリエット、よく聞いてほしいんだ」艦長は言った。しゃがんで高さをあわせ、私の目をまっすぐに見つめた。

「ええ」

「ちょっとした事故が起こってね。船は停止してしまっているんだ」

「そうね」私は見返し、原子炉の音が聞こえないことに気がついた。スクリューは止まってしまっているのだろう。

「この船は何かに衝突したのよ」姉が言った。

「氷の下で？ どうして？」

「ドスンといって、船全体が揺れる大きなショックがあったわ」姉はあきれたような声を出した。「もう2時間にもなるわ。あんたは何も気づかずにぐうぐう眠っていたけどね」

「何と衝突したの？ 冰山？」

「違うな」艦長はゆっくりと首を振った。「何かもう少しやわらかいものだ」

「クジラ？」

艦長は弱々しく笑った。

「それもたぶん違うだろう。だが正直なところ、何と衝突したのかさっぱりわからないんだ。潜水艦には窓がないからね。外の様子を見ることできない。船をバツクさせようと何度もやってみたが、だめだった。なんだか知らないが、衝突した相手にしっかりとはま

り込んでしまっているんだ」

「誰かが外に出て調べてみたら？」

艦長はつらそうな顔をした。「それもだめなんだ。気密室が使えなくなっている。衝突のショックで故障してしまって、どうやってモドアを開くことができないんだ」

「じゃあ、どうするの？」

「私たちは完全に閉じ込められてしまっているのよ」姉は突然大きな声を出した。「船は引つかかっただまま動けない。気密室も使えなくて、何に衝突したのか、外で何が起こっているのかもわからないのよ！」

両手をあげ、艦長は何とか姉を黙らせることに成功した。手をそえてソファアの背に寄りかからせたが、まるで空気が足りないともいうように、姉は肩を大きく動かして息をしている。私は、水の上に飛び出ってしまった魚を連想した。

「それで？」私は艦長を見上げた。

「これをごらん」ポケットから出してきた紙を広げ、艦長は私に見せた。

トナカイ号の設計図だった。きちんと印刷された紙の上に、文字や数字が赤インクでいくつも書きたされているのが見える。その書き方の乱雑さから、事態がいかに絶望的なのか伝わってくるような気がした。

「私は何をすればいいの？」

艦長は大きくため息をついた。「ここを見るんだ」

艦長の指先は、図上のある場所を指さしていた。

十分後には艦長に連れられ、私は中央廊下を歩いていた。艦長の話を私は承知したのだ。それ以外にやりようのない絶望的な状況であることは私にも理解できたからだ。部屋を出るとき、姉は私を抱きしめ、ほおにキスをしてくれたが、何も言わなかった。

長い距離を歩いて、まだ一度も足を踏み入れたことのない区画へ私は連れていかれた。鉄板で囲まれただけの飾りのない部屋だが、学校の教室を二つあわせたぐらいの広さがある。明かりも少なくひどく暗いが、ごたごたいろいろなものが置かれているのはわかる。まるで倉庫のような場所だ。

「ここは部品置き場だよ」艦長が言った。

「部品？」

私は見回した。木箱に入れられたり、布で包んであったり、そのままむき出しだったりするが、何百もの部品が、戸だなに収められていたり、そのまま床に置かれていたりする。

「ずいぶんたくさんあるのね」

「大きな船だからね。必要となる部品は何千とあるのさ」

「へえ」

「そういう部品をどうやって積み込むかわかるかい？」

「ううん」私は首を横に振った。

「港に停泊しているときには、クレーンでつり上げて、甲板にあるハッチから乗せる。だが何かの事情で、潜水中に部品を受け取らなくてはならないとしたら？ そのときのために、部品をやり取りするための気密室がもう一つ用意してあるのさ。部品専用だから、ものすごく小さなやつだがね」

「どのくらい小さいの？」

「このくらいかな？」艦長は手でやってみせた。本当に小さく、幅数十センチしかない。

「そんなに小さな気密室だから、子供じゃないと通り抜けることができないのね」私はため息をついた。

部品用気密室の前まで行くと数人の船員があらわれ、見慣れない人形のようなものを運んできたところだった。ゴムでできていて中身はなく、しぼんだ風船のようにぺちゃんこになっている。私が着る潜水服だと気がついた。最も小さなサイズのものを調節して、それでもブカブカだが何とか私に合わせようというのだろう。

## 氷の海

私がかぶるヘルメットをかかえた二人の船員が、その後ろを歩いてくる。きらきら光る金属製のもので、丸いガラス窓がついている。後頭部からは、長い空気パイプをしっぽのように引きずっている。

艦長がふたたび私の意思を確認し、船員たちが取り付いて、私に潜水服を着せ始めた。つま先から肩のところまですっぽりとおおうものだが、ごわごわして動きにくく、驚くほど重かった。私の手足に合わせてたくし上げ、金属のバンドでとめてある。

ヘルメットをかぶると、歩くどころか、立っていることだって不可能になった。船員たちがかかえあげ、気密室の中へ運んでくれた。空気パイプがしっかりと接続されていることをもう一度確かめてから、艦長はOKのサインを出した。すでに私は、ポンプから送られてくる空気を吸い始めていた。潜水服には断熱材が分厚く入れてあり、寒さは感じなかった。

私は、身長ぎりぎりの大きさしかない気密室に身を横たえていた。艦長が心配そうにのぞき込んだので、私は歯を見せて笑った。ヘルメットをとんとんとたたき、艦長が何かを言ったが、私には聞こえなかった。艦長は船員たちに合図を送り、気密室の扉がゆっくりと閉まり始めた。

扉が閉まると、私は小さな箱の中に閉じ込められる形になった。光一つない真っ暗な場所だ。

カチンと音がして、扉が完全にロックされたようだった。何秒もたたないうちにカチンという音がまた聞こえ、モーターのうなりとともに、反対側の壁がドアのように開き始めた。海へ直接通じる外側の扉だ。

すきまから外の明かりがもれてきた。猛烈な勢いで飛び込んでくる海水に追いついて立てられて、空気が外へ逃げ出していった。一瞬のうち、私は水に全身を包まれてしまっていた。強くではないが、水

圧で締め付けられるような感じがある。だが潜水服の内部には空気がちゃんと送られてきている。大丈夫、問題はない。

扉が開ききるとそつと手を伸ばし、私は船体のへりに指をかけた。分厚い氷を通して差し込む青白い光の中へ、私はゆっくりと出ていった。

まわりは薄青く、すべてが蛍光灯の光で照らされているかのような眺めだった。頭上には氷がおおいかぶさり、まるで天井のようだ。この天井は、見渡す限りどこまでも広がっている。港で見たときは違って、トナカイ号はなんだか縮こまって、おもちゃのようにちやちにしか見えない。

手すりにそつて身体を引き寄せ、私はゆっくりと気密室から離れていった。

へさきの方向へ顔を向けた。トナカイ号が何に衝突したのかわかるためだ。海水はガラスのように透き通っているので、はつきりと見ることができた。驚きのあまり、私は口をぽかんと開けていたに違いない。私の目の前には町が広がっていたのだ。

あれは本当に町と呼ぶのがふさわしかった。それ以外の呼び名は思いつかない。もちろん地面の上に建物が立っていたわけではない。そういう普通の町ではない。何千トンかの木材を使って四角い部屋を何百と作り、それが一つに集まって、ブドウの房のように大きな塊を作っているのだ。それぞれの部屋は地上の普通の家ほどの大きさがあり、すべてを合わせると数百メートルはあるだろう。そういう巨大なものが水中にたたずんでいるのだ。

その横腹にトナカイ号は衝突しているのだった。壁を突き破ってへさきをめり込ませ、まったく身動きが取れなくなっているのだ。この町に比べればトナカイ号など、木の幹にとまったセミのようではない。

町はずいぶんと古めかしく、作られたのは1世紀や2世紀の昔ではなく、もっと古いもののように見える。もちろん人影はなかった。ずっと昔に捨てられてしまった町なのだろう。何のためにここへやってきたのかも忘れて、私は見上げ続けた。

だが、やるべき仕事があることを思い出した。艦長たちに報告するために、船内へ帰ることにした。気密室へ向かって戻り始めたのだが、扉まであと1メートルというところまで来たとき、最後の見おさめということで、私はもう一度振り返って見上げた。そして真相に気がついて、ヘルメットの中であつと声を上げてしまった。

あの町全体が空気で満たされていることに私は気がついたのだ。町は空気、つまり泡の内側にあつたのだ。おそらく地球上に存在する最大の泡だろう。あの中なら、潜水服などなくても自由に息ができるに違いない。

わかつてもらえるだろうか。あなたが北極の氷の下にいて、息をふうつとはき出したときのことを想像してみしてほしい。あなたの口を離れた息は丸い泡になって、水の中を昇っていくだろう。そして最後は氷に邪魔をされ、へしゃげた『だ円』のような形になって、そこに張り付くだろう。波に押されて少しぐらい左右に移動するとはあるかもしれないが、北極は広く、夏でも氷原は何千キロも広がっているのだ。もしかしたら泡は、永久にそこにとどまり続けるかもしれない。

その泡が、いま私の目の前に存在するこれと同じぐらい巨大であったとしたら？ もしそうなら、その内部に町を作り、人々が生活することだって可能ではないか。

トナカイ号の中に戻って、ヘルメットをはずしてもらった後で、見てきたことを報告しても、艦長たちはすぐには信じてくれなかった。ポンプから送った空気の調整の仕方が悪くて幻覚を見たのではないかと、船医とこそこそ相談を始めるほどだった。

「ウソじゃないわ。本当に見たのよ」私はとうとう大きな声を出した。

「それで、船の様子はどうなっていたのだね？」議論するのが面倒になったのか、艦長は言った。

紙とペンを持ってきてもらって、私は図を描いて説明した。

「トナカイ号は、この町の横腹に突き刺さっているのよ。まるでナイフを突き刺すみたいにしてね。あれでは船がバツクできないのも無理はないわ」

「どうすればいいと思う？」船員の一人が言った。

「町を壊して、はまり込んでいる穴を広げるしかないわ」

「爆破か？」船医がつばやいた。

「少しならダイナマイトを積んでいますよ」機関長が言った。

「信管は？」と艦長。

「あります」

潜水服を脱がされ、私は木箱に腰かけて休憩することになった。船医はつきつきりで、私の血圧や体温を図っていた。温かい茶を飲ませ、チヨコレートを食べさせてくれた。私の目の前では、ダイナマイトの準備が始まっていた。

だがトナカイ号は戦争に使う船ではない。積んでいるダイナマイトの量など知れている。しかし、これで何とかやるしかなかった。

爆薬は15分ほどで完成したのだが、できればは、がっかりするようなものでしかなかった。ダイナマイトと信管を組み合わせ、それを防水テープでぐるぐる巻きにしてあるだけなのだ。そこから長い電線が伸びて、点火スイッチにつながっている。

だがこの電線が問題だった。船内のどこを探しても、十分な長さの電線を見つけないことができなかったのだ。何とか見つけたものを何本かつなぎ合わせても、やっと百メートルにしかならなかった。つまり私は、海中で爆薬を仕かけ、そこから百メートル以内のどこかに身を隠す場所を見つけないならならいわけだった。そして点火スイッチを押し、爆破が行われる。

再び潜水服を身につけ、私は船外に出た。手の中に爆薬をかかえている。邪魔になるので、電線はぐるぐる巻いてある。

## 氷の海

爆薬の仕かけ方については、機関長が説明してくれていた。若いころは軍人をしていて、そういうことには詳しい人だった。トナカイ号のへさきがめり込んでいるあたりのことを私はできるだけ正確に記憶し、紙に描いて説明したつもりだった。それをもとにして機

関長は、爆薬を仕かける場所を決めたのだ。

だが今だから言えることだが、機関長の考えは完全に間違っていた。地上の作業であれば、あれでよかつただろう。建物の壁は崩れ落ち、トナカイ号は自由になることができただろう。だがここは水中なのだ。物体は重力ではなく、浮力によって支配されている。支えを失った部分は下へ崩れ落ちるのではなく、水面へ向かって『崩れ上がる』のだ。

爆薬を仕かけるのに時間はかからなかった。甲板にそつてこわごとと近寄り、手をかけて数メートルはい上がり、私は仕かけた。衝突によってできた建物のすきまに、そつと差し込んだのだ。電線を伸ばしながら、私はゆっくりと後ずさりを始めた。

身を隠す場所はずぐに見つけることができた。ちょうどいい場所にトナカイ号のかじがあったのだ。板のように平らな形のものだが、私が身を隠すことができるだけの分厚さがあった。

私はそこに身体を落ち着けた。手の中には小さなスイッチがあり、指でちょっとはじかれるのを待っている。スイッチからは長い電線が生え、水中を伸びてゆき、黒い裂け目の中へ消えている。私は深呼吸をし、人差し指を伸ばし、スイッチをしつかりと押した。

水中というのは、予想以上に音をよく伝える場所だった。爆発音はとても大きく、一足飛びにやってきて、私を強く揺さぶった。一瞬だったが、何が何やらわからなくなったといつてもよいほどだ。トナカイ号も激しく揺さぶられ、振動するのが感じられた。

爆薬を仕かけたあたりは無数の泡に包まれ、何も見えなくなった。だがかじの影から身を乗り出し、私は見つめ続けた。

やがて泡が消え、水のにごりも薄れ始めたようだった。船体の揺れもおさまり、目をこらすと、爆薬を差し込んだあたりに大きな穴が開いているのを見ることができた。トナカイ号がつかまっていた裂け目は、二倍ほどに大きくなっている。船体に傷がついた様子もない。

喜びのあまり、私は声を上げかけた。だが突然どこから別の音が聞こえ、船体が再び振動を始めたのはそのときのことだった。クジラが集団でほえているような大きな音だ。音に合わせて手すりもびりびりふるえ、しかも一秒ごとにそれが激しくなってくるようなのだ。

何が起こっているのかわからず、私はキョロキョロし続けるしかなかった。もう揺れはあまりにも激しく、立っていることができないくて、力いっぱい手すりにつかまらなくてはならなかった。

音と振動が船の下からやってきていることに気がついた。首を伸ばしてのぞき込み、何が起こっているのか気がついて、私はぞつとした。

トナカイ号が衝突したことで、想像以上に長い裂け目が町の壁面を走っていたらしい。下を向いて長く伸び、何十メートルも先まで達していた。そこへ爆薬が爆発したのだ。建物の一部がガレキとなつて引きはがされ、本体から離れていった。だがその大きさが問題だったのだ。学校の校舎ほどもあり、突然姿をあらわし、魚雷のようにならへ向かってくるのが見えた。

ガレキに衝突され、強くたたかれて、トナカイ号の船体にヒビが入った。気密が破れ、そこから空気が噴き出しはじめた。私の身体

ほどもある大きな泡が、ものすごい勢いで上へ昇っていく。船は荒馬のように揺れつづけた。手が離れてしまい、私は水中にほうり出されてしまった。

空気パイプがピンと伸び、首の後ろが強く引き戻されるのを感じた。次の瞬間には引きちぎられ、空気パイプがゴムひものようにビヨンと縮むのが見えた。ムチのようになりながら遠ざかっていった。

巨大な泡の群れに押され、私の身体は水面へむかって押し上げられていった。まるでロケットのように上昇していったのだ。その後、何かが激しく背中に衝突したのだろう。鋭い痛みとともに、何もわからなくなった。

目が覚めたとき、私のヘルメットはすではずされていた。私は薄暗い場所において、木でできた天井を眺めながら、床の上に寝かされていた。そばの壁には窓があり、氷ごしのあの青っぽい光が差し込んでいた。

物音がしたので首を曲げると私のヘルメットがあり、一人の男がそれを調べているところだった。おもしろそうな表情であちこち向きを変え、ひっくり返して裏側をのぞき込んだりしている。私は男を見つめた。もちろん知らない顔だった。

男も私に気づき、見つめ返してきた。白いヒゲを伸ばし放題にした老人だ。背は高くはない。目玉はぎよろりと大きく、ピンク色の肌はしわだらけだが、嫌な感じはない。眺めていると、なんとなく笑い出したくなるような雰囲気がある。

「やあ、お嬢ちゃん」老人は言った。

「ここはどこ？ あなた一人しかいないの？」私は再び部屋の中を見回した。だが部屋の中は空っぽで、壁や天井以外は何も目に入らなかった。

「そうだよ。わし一人しかおらん」

「ここはどこ？」

老人はにっこりした。「あんたも見たらどう？ あの町の中さ。あんたは今、あの泡の内側にいるのさ」

思わず空気の匂いをかいでみたが、何もおかしいところはない。特に何の匂いもしないし、酸素もきちんと含まれているようだ。「もちろんこの空気はちゃんとするよ」老人は言った。「外からは見えなかっただろうが、この町の内部には植物園のような場所があり、海草が大量に栽培されている。それが酸素を出すから、息ができなくなることはないのさ」

「あなたは誰？」

「わしの名はクリス。れっきとしたイギリス人さ。三十年前のことだが、首相の命令で北極探検隊が組織されたことを知っておるかね？」

「ううん」私は首を横に振った。

「そうだろうな。あんたが生まれるずっと前のことだ。ところであんたは、その潜水服を脱ぎたくはないかね？ そのほうが楽だろう？」

クリスに手伝ってもらって、重い潜水服を脱ぐことができた。ずいぶん楽になり、立ち上がって歩き回ることができるようになった。クリスも立ち上がった。部屋の外へ出るそぶりを見せたので、私もついていった。

部屋を一步出ると広い廊下になっていたが、なかば水没していた。この町は全体が少し斜めになっているので、半分が水に洗われているのだ。クリスはその水面を指さした。

「あんたはあそこに浮いていたのだよ。それを引っ張りあげたのさ」  
「そうなの」私は少しの間口を閉じていたが、突然思いついて大きな声を出した。「トナカイ号はどうなったの？」

「あの潜水艦のことか？ わしはすべてを見ておつたよ。衝突したときには本当にびっくりした。ここの床もぐらぐら揺れたよ。鉄のドアが開いてあんたが出てきたときにも、またびっくりした。しかもその次は『塔』に爆薬を仕かけようとするじゃないか」

「塔？」

「本当の名は知らんよ。今となつては誰も知らないことだろう。だがわしは、この町のことをそう呼んでいるのさ。形が似ているからね。とにかくあんたは塔に爆薬を仕かけた。大胆なことをするもんじゃな。この塔は古びて、ガタガタになっておるのに」

「この塔はいつからここにあるの？」

「それは誰も知らんことだろうよ。わしが三十年前にやってきたときには、すでにこういう無人の状態だった。それはともかく、あんたが仕かけた爆薬のせいで塔の一部が崩壊し、ガレキが潜水艦をおそつた」

「ええ」

「だが潜水艦は沈没することはなかった。エンジンをフル回転させ、何とかバツクしてガレキの外に出たよ。あちこちへこんだひどい姿だったが」

「人が死んだりしたと思う？」

「それはどうかね」クリスは首を振った。「そのあとしばらく、潜水艦はじつと動かなかつた。船の外には誰も姿を見せなかつたな。だが再びスクリューを動かさし、斜めに傾いたかなり危なっかしい姿だった。何とか走り始めたよ。よたよたしながらゆっくりとだったが、どこかへ姿を消した。来た道に戻っていったようだったな」

「私はおいてけぼりにされてしまったの？」私は、両目に涙がたまってくるのをどうしようもなかつた。

「それは仕方がないさ」クリスは私の肩にそつと触れた。「わしが艦長だつたとしても、同じ判断をくだしただろうよ。空気パイプが切れてしまったのなら、あんたが生きている可能性はまずないと見るべきだろうね。それに船は傷だらけだ。生きている可能性がひどく薄いあんたのことよりも、他の乗組員たちのことを考えるべきだ。あの船にはたくさん乗っているのだろう？」

「トナカイ号は客船なの。お客さんが120人乗っているわ」

クリスは目を丸くした。「それならなおさらだ。一刻も早く浮上し、港へ送り届けるべきだよ」

「そうね」クリスの言うことは、私にもよく理解できた。

私は、部屋の中をある音が満たしていることに気がついた。私が見回し始めると、クリスも気がついたようだった。塔を作っている木と木がたがいを押し付け合い、きしみあうギーギーという音だ。

大きな音ではないが、まわり中から聞こえてくる。まるで壁の向

こうやそこらの物影に何十人も妖精が身を隠し、私たちの様子を探りながらこそそささやきあい、さんざめいてでもいるかのようだ。

「この音かい？」クリスが言った。

「ええ」

「氷の下にもかすかな海流があるらしい。それに押されて、一日にほんの数メートルというペースだが、この塔はゆっくりと移動しているのさ。どこから来て、どこへ行くのかは知らんがね。だがとにかく、その海流を受けて塔がきしみ、この音が聞こえるらしいが、まるで目に見えない小人たちがおしゃべりをしているかのようだろう？ わしはこれを『塔が歌っている』と表現しているのだよ」

「そうね。確かにそんな感じだわ」

クリスは私を連れ、廊下を歩き始めた。曲がり角をいくつも曲がり、交差点を何回も通り抜けた。幅の狭い急な階段を登っていった。

どこまで歩いてても、塔の歌声はギーギーと聞こえつづけた。決して不愉快な音ではなかった。曲がり角を曲がっても、何かの物影に入っても、追いかけるように聞こえてくる。本当に妖精たちがさんざめき、姿を隠したままずっとついてきているかのようだ。ここで三十年間も一人で暮らしてきたクリスが孤独に押しつぶされてしまうことがなかったのは、このおかげだったのかもしれないという気がした。

## 氷の海

私たちは歩き続けた。あちこちに窓があり、外の光が差し込んで明るかった。

窓にはガラスも何もなかったが、顔をつき出してみると、外にもちゃんと空気がある。少し潮くさく湿っぽい、息苦しくはない。そういう空気が塔を取り囲んでいて、何百メートルか先には水の膜まくが垂直に立っているのだ。それが空気と水の境目で、自分が泡の内側にいるということをはつきり納得することができる。

窓から顔を引っ込め、私たちは再び歩き始めた。クリスマスはしつかりとした足取りで、さつさと歩くことができた。だがある階段を登りきったところで、私はとうとう立ち止まってしまった。息が切れたからではない。広い場所に出て、景色に圧倒されてしまったからだ。クリスマスも立ち止まり、振り返って満足そうににっこりした。

「この部屋のことを、わしは大聖堂と呼んでいるのだよ」

その名は本当にふさわしいと私も思った。見上げると頭の中が空っぽになってしまいそうなほど天井が高く、地方の小さなラジオ放送局なら、屋根の上の電波塔まで含めてすっぽりとおさまってしまいそうな高さがある。

六本の大黒柱に囲まれた部屋の形は、巨大な蜂の巣の中にあるようでもある。橋のような渡り廊下が頭上はるかを横切っているが、本当は数メートルの幅があるはずが、まるで小枝のように小さくしか見えない。近寄ってそつと触れてみたが、壁から突き出しているクギの頭は私のこぶしよりも大きかった。

何分かの間、私は大聖堂の中を見回していた。目の前には大きく長い階段が待ち構えていて、さらに上へむかって伸びている。「もういいかね？」とクリスマスが言った。

「ええ」

クリスのあとをついて、私は再び歩き始めた。

塔の内部は複雑で、まるで高層ビルディングのようだった。クリスが大聖堂と呼んでいた部屋がその中心にあり、かつては人が集まる広場のようなものだったのかもしれない。

家々はアパートの部屋のようにずらりと並んでいるが、いくつかはドアが開いたままになっていたので、内部をのぞき見ることができた。壁には明かり窓があり、外の光を取り入れるようになっていいる。一つのアパートはいくつかの部屋で仕切られ、小さいが居間や寝室、台所などがちゃんとある。

マーケットの跡も見つけることができた。たなはすべて空っぽだったが、かつては様々な商品が並べられていたのだろう。幅の広い階段をいくつも上り下りし、私たちは歩き続けた。かつては何百人もの人々がここで生活していたのだろうという気がした。

とうとう私たちは、クリスが住居にしている部屋に着いた。といっても何か特徴があるわけではなく、他の何百の部屋と違うところはなかっただろう。ただこの部屋だけはがらんとした感じがなく、家具や日常の道具類がせいとんして置かれていて、いかにも人が住んでいるらしい感じがした。

部屋のすみには小さなベッドがあり、イスやテーブルもある。鉄でできたストーブもあり、その中で木切れがちよろちよると燃えている。その上にはナベを置くことができるようになっていて、クリスはさっそく湯をわかし始めた。

「海草のスープを気に入ってくるといいがね」クリスはうれしそ

うに私を振り返った。

私は部屋の中を見回し続けた。ここにも窓があり、光がふんだんに降りそそいでいる。

「ここは寒くはないのね。氷の下なのに」

「氷が温室のような働きをしているからさ。塔を包んでいる空気の層も、しっかりとした断熱材になる。この塔は、暖かい毛皮のコートでくるまれているようなものさ。もちろんそれも白夜になっている夏の間だけで、冬になると猛烈に寒いが」

「白夜って？」

「北極の近くでは、夏の間は一日中太陽が沈まないから、真夜中でも明るいのだ。それを白夜という。逆に冬の間は一日中日がささず、夜が続くんだが」

「へえ、知らなかったわ」

「今は真夏だ。冬になるまで、暗闇を目にすることは当分ないよ」

「こんなところに、あなたは本当に一人で三十年間も住んでいるの？」 私は感心した声を出さないではいられなかった。

「そうだよ。まあおかけ」 クリスはイスを指さした。湯がわくのを待つ間、自分もベッドに腰かける気になったようだ。

「三十年前にはイギリス人だったって言ったわね」

「今でもそうさ」 クリスは笑った。「首相の命令で北極探検隊が組

織され、わしもその隊員に選ばれた。飛行船を使った探検隊でね。氷の厚さを測ったり、海底の地質を調査したりするのが目的だった」「飛行船って？」

「お嬢ちゃんは見たことがないのかな？ 水素ガスのつまった細長い形の風船だよ。エンジンの力でプロペラを回して動くようになっている。ところで、あんたの名はなんというのかね？」

「ジュリエット」立ち上がって、私は握手をしにいった。クリスは照れたような顔をしていたが、しっかりと握手を返してくれた。私は口を開いた。

「その探検隊員が、なぜ今こんなところにいるの？」

「探検隊はときどき氷の上に着陸し、ドリルで穴を開けて氷の厚さを測り、地質調査をおこなった。はじめ真っ白だった氷原の地図は、ゆっくりと着実に埋まっていった。だがあるとき、思いがけない事故が起こったのさ」

「どんな？」

私は思わず身を乗り出していたと思う。クリスが笑った。

「ドリルの操作係として、わしは氷の上にいた。自動車ぐらいの大きさがあって、モーターのついた巨大なドリルさ。ガーガーと大きな音を立てながら回転するんだ。」

ドリルは氷の上にすえつけられ、わしはスイッチを入れた。ドリルの刃先が、氷の中へすばやく食い込んでいったよ。だがそのときそれが起こった。何の前触れもなく、突然氷に大きなヒビが入った

のだ。ピシピシと音がし、足元がぐらぐら揺れた。ヒビは一本ではなく、クモの巣のように何本も走るのが見えた。わしはその真ん中にいたのさ。あっと思ったときには、わしは氷の中へ落ちていくところだった。

何メートル落下したのかはわからない。気がつくところの塔の屋上にいて、目を回しておった」

その様子を想像して、私はクスクス笑ってしまった。クリスも笑い、気を悪くしたふうもなく続けた。

「すぐに立ち上がり、上を見上げたが、あるのは氷の天井だけだった。くずれた穴の跡はもちろんなあったが、すでに氷のカケラでふさがってしまった。天井は何メートルも上にあり、手が届くはずもなかった。外へ出るのは不可能だと一瞬でさੱつたよ。その日以来、わしはここにいるのだよ」

「探検隊の他の人たちはどうなったの？ 助けてはくれなかったの？」

クリスは首を横に振った。

「氷が割れた瞬間に電気のケーブルが引きちぎられ、火花がはでに散った。それが引火したらしい。氷の上で巨大な炎があがるのが見えたよ。飛行船に使われている水素ガスはとても燃えやすいからね」

「じゃあ、助かったのはあなた一人だけなの？」

「皮肉にもそういうことになるね」

「でも何を食べて、どうやって生きてきたの？」 知りたがりだとは

自分でも思ったが、私は質問しないではいられなかった。

クリスはにっこりした。「ついておいで。その目で見せてあげよう」

ナベを火の上から降ろし、クリスは立ち上がった。私を連れて部屋を出、階段を降りていった。

ずっと下ってゆくと、広い場所に出た。さっきの大聖堂ほどではないが、ここも本当に広々としていたのだ。丸い形をして、大きさは町の体育館ほどはあっただろう。壁には明かり窓がいくつもあり、とても明るい。

私たちはベランダのような場所において、手すり越しに、すぐ下の水面を見下ろすことができた。だがそれが、海草で一面におおいつくされていたのだ。私の腕ほどもある茎は百メートル以上に育ち、無数の葉を生やしている。その表面には小さな泡がびっしりと張り付き、それが大量の酸素を含んでいるということだった。クリスが言っていた植物園とは、このことだったのだ。

胸がつまるようなときどきする思いで、私は海草の森を見下ろし続けた。水底を見通すことなど絶対に不可能なほど濃く生え、からまりあって、薄気味悪く感じなかったと言えはウソになる。だがクリスはいかにもいとおしそうにしているので、悪口は言わないことにした。

「海草ばかり食べて、あきてしまわないの？」私は口を開いた。

「そりゃそうさ」クリスはウインクをした。「ついておいで。水族館を見せてあげるよ」

クリスと私はドアを通り抜け、別の部屋へ入っていった。

こちらは植物園ほど広くはなかった。明かり窓も少なかったが、水面は十分に見渡すことができた。ガラスのように透き通った水にはまったく波がない。底まで五十メートルはありそうだが、魚たちの姿を見ることができた。黒い色をして体長六十センチほどのものだが、中には二メートル近くに成長したものもいるし、すみのほうには数センチしかない小魚たちが群れているのも目に入る。

「これは何の魚なの？」

「イワシだよ」

「イワシ？ あの大きなやつも？」

クリスは笑った。「缶詰にするのとは少し種類が違うがね。あとでごちそうしてあげるよ」

「ええ」

私たちはクリスの部屋へ戻ってきた。すぐにしたくを始め、クリスは食事をごちそうしてくれた。食べながら話を聞きたがったので、両親のことや姉のこと、カナダへ旅行に出かける途中だったことなどを話した。

だが海草のスープを飲み終え、二匹目のイワシを平らげるころには私は眠くなり、何度もアクビをくり返した。手で隠しもせず、私が遠慮なく口を開けるものだから、クリスはとうとう笑い始めた。

「疲れたのだろう。もうお休み。わしのベッドを使うがいい」

「あなたはどうするの？」

「そこらを片付けて適当に休むさ。気にすることはないよ。明日は早く起きて、ボールを見にいこう」

「ボールって？」

「わしだって、いつまでも氷の下にいるつもりはない。脱出する方法は考えてある。そのために必要なものさ」

「どんなもの？ どうやって使うの？」

「今夜はもうお休み。目が半分閉じかかっているよ」

言われたとおりにすることにして、立ち上がって、私はベッドまで歩いていった。ドスンと倒れこんで、海草をあんで作った毛布にもぐりこむと、十秒もたたないうちに眠り込んでしまった。だがその間も、姿の見えない音だけの妖精たちは、私のまわりをぐるりと取り囲み、さんざめきながら楽しそうに踊り続けていた。

なぜ目が覚めたのか、自分でもよくわからなかった。床の上を行くクリスの静かな足音のせいだったかもしれない。顔を向けるとクリスが窓のそばに立ち、外の様子を眺めているのが見えた。私がベツドに入ってから何時間か過ぎているのに違いなかったが、部屋の中には何も変わった様子はなかった。

「何をしているの？」私はそつと話しかけた。

「ここへきてごらん」クリスは窓の外を指さした。私はベッドからすべり出て、隣に並んだ。

窓の外の風景にも、寝つく前と変わったところはないうだった。私たちは泡の内側にいて、少し離れたところに水の膜があり、その向こうには北極の海底が広がっている。だがすぐに気がついた。海中を小さな泡が一つただよっているのだ。

小さいといっても、直径１メートルはあっただろう。海底からすうと立ち昇ってくるのだ。近寄ってきて、塔を包む膜にぶつかり、一瞬は丸い形のままがんばるが、すぐにパチンとはじけて消えてしまった。

あの泡は何だろう。眺めているとすぐにもう一つ昇ってきて、同じように膜にぶつかり、飲み込まれて消えてしまっのが見えた。

「あれは何の泡なの？」私は言った。

「困ったことになったよ」

「あれはどこからやってくるの？」同じような泡がもう一つ下から昇ってきて、やはり同じように膜にぶつかり、飲み込まれて消えてしまっのが見えた。

「もちろん海底からさ」

「それがどうして困るの？」

「ジュリエット」クリスはとうとう振り返った。「地質学の本ならどれにだって書いてあることだろうが、北極の海底にはメタンが大量に存在しているんだ」

「メタン？」

「ガスの一種さ。火をつけるとよく燃える。古代の生物の死がいが海底にうずまり、何億年もかかって変化したものらしい」

「知らなかったわ」

「メタンが北極のどのあたりに、どのくらいの量うずまっているのか調べることが、あの探検隊の目的の一つだった。掘り出すことができれば、燃料として有望だからね」

「そうね」私はうなずいた。

「この塔の真下にも、きつとそのメタンガスが何千トンも眠っているんだ。あの泡がそうだよ」

「それが困ったことなの？」

「この塔で三十年間暮らしてきたが、メタンが昇ってくるのを見たのは今日が初めてだ。もしもこのまま大量に昇ってきたりすれば、こここの空気は汚染されてしまう。人間はメタンガスの中では息をすることができないのだよ」

「死んじゃうの？」

クリスは黙ってうなずいた。

「そんなものが、どうして突然昇ってくるようになったのかしら？」  
私は言った。

「昨日の爆破のせいだろうな。大きな爆発だったから、その影響で海底にヒビが入ったのだろう」

「でも…」

「気にすることはない」クリスは微笑んだ。「あの爆破がやむをえないものだったことは、わしもよくわかっているよ。爆破しなければ、トナカイ号は今でも塔に突き刺さったままだったろう」

涙が出て、私は鼻をすすり上げ始めた。クリスは私の肩にそっと触れた。「気にすることはない。今にもあの泡は止まってしまいかもしれないのだから。そうなれば何も心配はない」

窓のそばに腰かけ、私たちは外を見つめ続けた。その後も泡は、一分間に一つぐらいの割合で、ポツンポツンと姿を見せた。泡が一つあらわれ、膜にぶつかってパチンとはじけるたびに、塔の空気は汚染されていくのだ。クリスと私が生きていられる時間をきざむ砂時計であるかのように恐ろしく思えた。

だがクリスの肩に寄りかかったまま、私はいつの間にかうたたねをしてしまったらしい。突然に揺り起こされた。

顔を上げるとクリスが指さしたが、そんな必要はまったくなかった。メタンの泡はさっきの倍ほどの直径があり、しかも一つずつではなく、クサリのようにつながって昇ってくるようになっていたのだ。もう数を数えることさえできなかつた。まるで機関銃のように、

塔を包む膜に合流を続けている。

「クリス」私は振り返った。

クリスは返事をしなかった。私の手をつかみ、駆け出したのだ。

部屋を出ようとしながら、クリスは荷物やカバンをひつつかみ、肩に乗せ、わきの下にはさんだ。いくつかは私にも持たせた。意味はわからなかったが、私はしたがった。荷物を持ったまま、クリスのあとについて廊下へ飛び出した。

二人とも口をきかずに走り続けた。曲がり角をいくつも曲がり、階段を何階も駆け上って、やっと目的の場所に着くことができた。私は息を切らしていたがクリスは平気な様子で、もうまわりを見回している。いつの間にか塔の頂上に出ていて、ビルの屋上のような場所だが、見上げれば氷の天井がすぐそこに見える。ミルクを混ぜたガラスのような、透き通る美しい物体だ。

「こつちへ来るんだ」

思わず立ち止まってしまっていたので、クリスに強く腕を引かれた。

屋上のすみに、球形をしたボールのようなものが置かれていることに気がついた。本当にボールのように丸く、根元にはクサビをいくつか押し込んでとめてあるが、それがなければゴロンゴロンと転がっていても不思議はないだろう。

## 氷の海

直径は三メートルほどある。全体は木でできているが、手のひらほどの大きさしかないが、ガラスのはまった小さな窓がいくつもある。どうやら人が乗るものようだ。昨夜クリスが言っていたボー

ルとは、これのことなのだと気がついた。

「これは何なの？」

クリスは返事をせず、ボールの一部に手をかけ、強く引いた。驚いたことにそこはドアで、はつていかなくはならないようなせまいものだが、入口が口を開けた。クリスはその中にカバンや荷物を放り込み始め、私の手からも受け取って、ぼんぼん投げ込んでいった。

「どうするつもりなの？」

「この中に入るんだ」クリスは私の背中に手を当て、乱暴に押し込もうとした。

「どうして？」

「早くするんだ」

とうとう私は中へ押し込まれてしまった。入口を通り抜けるときにわかったのだが、壁が分厚く作られているので、思ったよりも中はせまかった。投げ込まれた荷物が足元に転がっている。つまりいて転びそうになった。振り返るとクリスも入ってきて、内側からドアをばたんと強く閉めたところだった。

「何をしようというの？」

だかクリスは答えなかった。壁ぎわにある大きなレバーを回して、ドアをガチンとロックしたのだ。見るからにがっしりしたレバーだから、ボールは完全に密閉されたのだらう。荷物を片付けてスパー

スを作り、私たちは床に座った。壁がデコボコして背中が痛く、小さな窓から差し込んでくる光しかないから、ひどく暗かった。

私はボールの内部を眺めた。いかにも手作り風のものだ。材料は塔の一部を解体して手に入れたものだろう。全体はクギで接合され、ところどころ鉄板で補強してある。

「これはあなたが作ったの？」

「そうさ」クリスは少し傲慢そうな顔をした。「十五年かかったよ。その前の十五年は塔の中で生き延びることに必死で、とてもそんな余裕はなかった」

「こういうときが来ると、あらかじめわかっていたの？」私は不思議そうな顔をしていたに違いない。クリスは微笑んだ。

「わかっていたわけじゃない。だが、来るかもしれないとは思っていた。こうも突然やってくるとは、予想していなかったがね」

「しまった」私が突然大きな声を出したので、クリスはひどく驚いた顔をした。

「どうした？」

「ストーブの火を消すのを忘れたわ。ついたままよ。メタンガスは燃えるんでしょう？ 火事になるわ」

「いいんだ」クリスは笑った。「わざと消さないできたのだよ」

「どうして？ メタンガスに引火するわ」

「ああ、すればいいさ」

「でも…」

だが私は、その先を続けることができなかつた。このときまでには、メタンが塔の内部を満たしていたのだろう。塔の中の空気は酸素を十分に含んでいた。そしてクリスの部屋では、小さいとはいえストーブがちろちろと炎を上げていたのだ。

その瞬間のことは、とてもよく覚えている。ドンという大きな音とともに塔が激しく震え、ボールの外がまばゆい光でいっぱいに満たされたのだ。あまりにもまぶしく、目を開けていることもできなかった。爆風に押され、あっと思う間もなくボールは宙を舞い始めていた。

メタンガスの爆発とは、それほど強力なものだったのだ。衝撃波は、氷の天井を一瞬で吹き飛ばした。氷のカケラが何百も北極の空へ飛び出し、放物線を描いたのだろうか、私たちのボールもその中に含まれていたわけだ。

一瞬は大きな力を受けて、私たちはいやというほど強く床に押し付けられたが、すぐにふわりとした無重力の感覚に変わり、身体が空中をただよっていきそうになった。だがそれも長くは続かず、ドスンと大きな音がして、ボールがどこかにたたきつけられると同時に、また強く押し付けられた。力まかせに背中を踏みつけられたような気がした。ボールは激しく揺れ、荷物がぶつかってきて、思わず悲鳴が出た。

そのあとボールはくるくるとまわり続け、外からはガサガサと音が聞こえていたが、そのうちに静かになった。

私たちはおそろおそろ顔を上げた。ボールが停止したのだと気がついた。

「ふうっ」

私は大きなため息をついた。その表情がおかしかったのか、クリスが笑った。私たちの身体は上下逆さまになり、荷物と荷物の間にサンドイッチになっていたから、まずはい出して体勢を立て直さなくてはならなかった。

レバーを動かし、クリスはドアを開いた。私たちは、顔をそつと外に突き出した。

空気は驚くほど冷たく、まるで肌をたたかれているような気がした。私に続いてクリスもはい出てきたが、すぐに震え上がった。クリスは荷物を開き、服をいくつも取り出して、私に着せてくれた。もちろん自分も同じようにした。海草の繊維をほぐして作ったものだったが、見た目はごわごわと固そうだが、着てみると驚くほど暖かかった。私が目を丸くしていると、クリスはにっこりした。

「子供のころ、祖母が家で機はたを織っていてね。記憶を頼りに、見よう見まねでやってみたのだよ。三十年といえば長い時間だ。ひまはたっぷりあったよ」

## 氷の海

寒さを感じなくなると、落ち着いてまわりを見渡すことができるようになった。私たちは真っ青な空の下、どこまでも続く平らな氷

原にいた。どの方向を向いても、まったくデコボコなく続いている。

だが一カ所だけ、なぜか氷が少し盛り上がり、その影に雪が深くたまっていた。ボールがそこへうまく落ちてくれたのは、幸運としかいいようがないだろう。分厚い雪がクッションの役目を果たし、ブレーキにもなってボールを受け止め、停止させてくれたのだ。

振り返ると、自分たちがどこから飛んできたのか知ることができた。二百メートルほど先で氷が大きく割れ、海面が濃い青色の姿を見せているのだ。氷の断面はギザギザにとがり、小さなカケラがスチロールのように浮かんでいる。

そつと手をつなぎ、私たちはそこへ向かって歩き始めた。あしもとの氷は分厚くがんじょうで、まるでコンクリートの床のようだ。薄い雪がその表面をサラサラとおおっている。足跡をつけながら、私たちは歩いていった。

氷のへりに立つと、深い崖をのぞき込んでいるような気分になった。割れ目は、それほど直角にストンと落ち込んでいたのだ。波はなく、水面はとても静かで、青いガラスのような輝きだ。ゆっくりと吹き渡っていく風以外は何の音も聞こえない。

だがそこへ、突然それが起こったのだ。驚いて飛び上がったが、あまりのことで、私は逃げることも駆け出すこともできなくなってしまう。身体が石のように固まってしまったのだ。

しかしクリスはそうではなかった。とつさに私をかかえあげ、後ろを向いて、あとも見ずに駆け出したのだ。

ボールのそばへ戻って物陰に身を隠すまで、クリスは立ち止まら

なかった。荷物のようにかつき上げられ、私はクリスの肩越しに見ることができた。だからあの光景を目にしたのは、この世で私一人だけだろう。

常に浮力を受けて浮かび上がるうとしていたが、塔は氷によって頭を押さえられていた。その氷が、メタンの爆発によって吹き飛ばされてしまったのだ。浮力というのは、どんなに巨大な戦艦でも浮かべることができるといふものだ。塔が水中で受けていた浮力は、それこそ想像を絶する大きさだったことだろう。それが一気に解放され、バネ仕かけのおもちやのようににはじけたのだ。

突然姿をあらわし、静かな水面を突き破りながら、塔はとてつもなく大きな水音を立てた。氷をけずり取るバリバリという音がそこに加わった。まわりつく海水を、塔はシャワーのようにまき散らした。氷のへりに何十ものヒビが入るのが見えた。はねあげられて空中を舞った家ほどもある氷塊が落ちてきて、私たちからほんの少ししか離れていないところでバラバラにくだけた。目を開いて、私はそれをすべて見ていたのだ。

クリスは私をかかえ込み、守ろうとしていたが、私は首を伸ばして見つめ続けた。衝撃は氷を伝わり、足元でも感じることもできた。塔の動きが完全に止まり、木と木、氷と氷が押しつぶしあう音が聞こえなくなつてから、やっとクリスは私を放してくれた。自分も立ち上がり、振り返って眺めた。

塔は巨人の腕のように氷上に突き出し、ありとあらゆる窓から海水が流れ落ちていた。何十もの滝が一つに寄せ集まったかのような眺めだ。大量の水滴が空中を舞い、虹を作った。北極の透明な空気の中にできた虹だ。あれほど濃く、鮮やかで美しい虹を、私は一度も見たことがない。

やがて水はすべて落ちきってしまったようだった。流れが止まり、虹は消え、ポタンポタンと少しずつ落ちてくるだけになった。氷の下で見たときよりも、塔はうんと黒々としていた。もちろんこれは頂上の部分、つまりほんの一部分に過ぎなかったのだが、それでもこんなに巨大なものだったのかと、あらためて思わないではいられなかった。

飛行機が姿を見せるまで、一時間もかからなかった。ボールの中から取り出した道具を使って火を起こし、スープを飲みながら、クリスと私は待っていたのだ。

この飛行機はメタンの爆発音を聞きつけたのだと思っていたのだが、そうではないと後になってわかった。彼らはあの虹を見つけていたのだ。あの虹は空高くかかり、50キロ離れた場所からでも見ることができたそうだ。あまりにも色が濃く鮮やかなものだったので、何が起こったのだろうと確かめに來たらしい。

それはともかく、飛行機がやってきてくれたのだ。エンジンの音は早くから聞こえていたが、やっと見えてきたのは空のかなたに浮かぶ小さな黒い点で、はじめはハエほどの大きさでしかなかったが、みるみる大きくなってきた。塔の姿に気づき、すでに高度を下げ始めている。

「何だね、ありゃあ？」クリスが声を上げた。「近ごろの飛行機には屋根があり、窓にはガラスもあるのかね？ それにあの大きさはどうだい」

思わず微笑まないではいられなかった。三十年前の飛行機は、これこそ屋根のない竹とんぼのようなものばかりだったのだろう。せ

いぜい二人しか乗れない操縦席はむき出しで、エンジンは一つしかなく、機体は木で作られ、翼には布が張られていた。だが現代の飛行機は違う。エンジンを複数装備し、銀色に光る軽金属でできている。

ぼんぽんと飛びはねながら、飛行機は氷の上に着陸した。機体に描かれているマークから、空軍の偵察機だということはすぐにわかったが、幸運だったのはイギリス空軍の所属だったことだ。飛行機が停止するとすぐにそばへ駆けていったのだが、二人いるパイロットたちは、私たちの顔を見てもわけがわからない様子で、ピントのはずれた質問を繰り返すばかりだった。

「おまえたちは誰だ？」

「どこから来た？ そのでかい建物は何だ？」

「あの虹は何だったんだ？」

「おまえたちはロシア人か？」

クリスと顔を見合わせ、私は大きな声を出した。

「何でもいいから早く乗せてよ。寒くてかなわないわ」

パイロットたちも顔を見合わせていたが、機内へ入れてくれた。

私たちを座らせ、暖房を強くし、熱いコーヒーを飲ませてくれたが、話を聞いても、とても信じられないという顔をした。

身体が温まってから、もう一度外に出てボールのところへ戻り、パイロットたちにも手伝ってもらって、荷物やカバンを飛行機に積み込んだ。それからシートベルトを締め、エンジンがうなりを上げ、飛行機は滑走を始めた。気がつくのと、シートに頭をもたせかけ、クリスはもういびきをかき始めていた。

空軍基地までは、ほんの数十分の道のりでしかなかった。念のためクリスは基地内にとどまり、一週間ほど医師が様子を見ることになったが、私はいても立ってもいられなかった。司令官に頼み込んで、その翌日の定期便に乗せてもらえることになった。北極とイギリス本土を結んでいる大型の輸送機だ。

搭乗する直前、もう一度クリスに会いに出かけ、あいさつをすませた。「またすぐ会えるさ」とクリスは機嫌よく送り出してくれた。座席に身体を落ち着け、シートベルトを締めるころには、私はもううきうきし始めていた。

定期便は、昨日の偵察機よりもずっと乗り心地がよかった。みんなが私の話を聞きたがり、パイロットなどは私を操縦室へ招待してくれた。話し疲れると窓のそばに座り、私は外を眺めた。真っ青な北海が広がっている。ほんの何日前、私はあの波の下をトナカイ号に乗って航海したのだ。

だが気になることもあった。基地の司令官が教えてくれたのだが、トナカイ号はまだイギリスに帰港してはならず、カナダ側にも姿を見せていなかったのだ。

だが考えてみれば、あの衝突事故が起こったのはほんの三日前のことではない。トナカイ号は、まだどこかの氷の下を走り続けているのだろうか。浮上しないと無線機は使えない。

穏やかな日だったので、順調に飛行を続けることができた。北海が突然終わり、海岸線が目に入ってきたとき、私は思わず声を上げた。イギリスの大地なのだ。

空港に着陸した三十分後には、私は自動車の後部座席にいた。空

軍の司令官が気をきかせて、秘書ごと自動車を貸してくれたのだ。自動車はハイウェイに乗り入れ、秘書はぐいとアクセルを踏んだ。

自動車はある港へむかっていた。ニュースを知らされ、飛び上がるほどうれしかったのだが、数時間前、トナカイ号がここへむかっている姿が海上で目撃されていたのだ。だがトナカイ号は、無線機が使えなくなっているらしかった。浮上してはいるが、沈黙を保つたまま航行を続けていた。

棧橋に着き、自動車がブレーキを鳴らして停車すると、私はドアを開けて飛び出した。噂を聞きつけて集まっていた見物人たちをかき分けて、一番前に出た。急いでエンジンを止め、サイドブレーキを引いて、秘書が追いかけてきた。私がどこかへ行ってしまうないように、しっかり手をつないでおく気になったようだ。

少し霧が出ていたが、やがてトナカイ号がゆっくりと姿をあらわした。タグボートがスクリューを精一杯まわして、接岸させようとしている。だが両者は大きさが違いすぎる。タグボートの姿は、丸太に張り付いたカエルのようでしかなかった。

トナカイ号の姿を見て、私は息をのんだ。損傷のひどさが想像以上だったのだ。へさは完全につぶれ、脱ぎ捨てた靴下のようにしわが寄っている。側面は、あちこちが、けとばされたかのようにへこんでいる。スクリューはひん曲がり、羽根の一枚はブーメランのように別の方向を向いている。

船尾に目を走らせたとき、小さな四角い出入口のようなものを見つけて、私は胸がいっぱいになった。船体の大きさに目を奪われて、ぼんやりしていると見逃してしまいそうなものだ。だが、あれが部品用気密室なのだ。私はあれを通過して船外へ出たのだ。

甲板の上に艦長がいることに気がついた。ひどく疲れた様子だ。北極の氷の下からここまで、本当にやっとやっと帰ってきたのだらう。

船と棧橋をつなぐ橋の固定が終わるのを、私は待つてなどいられなかった。気がついたときには秘書の手を振りきり、駆け出していた。船員たちをかき分け、飛ぶようにして橋を渡っていった。足音に気づき、艦長が顔を上げた。

このときの艦長の顔を、私は一生忘れることはないだろう。疲れきってもいたのだらうが、たった数日でとても年を取ったように見えた。もちろん船と乗客を無事に連れかえる責任感もあったのだらうが、彼のやつれ具合の何割かには私が直接関係していたことだらう。彼は私の命について責任を感じていたのだらう。私は胸がふさがりそうになった。

私の顔を見ても、艦長には意味がわからない様子だった。一瞬間、疲れきった表情のままだったが、それはすぐに破れ、私が誰なのか気がついたようだった。

「ジュリエットか？」艦長はかすれた声を出した。

「そうよ」駆け寄りながら、私は大きな声で答えた。そのまま彼の腕の中に飛び込んだ。艦長は少しよろめいたが、すぐに力を取り戻し、私をしっかりとかかえあげた。

艦長が次の言葉を発することができたのは、何秒もたつてからだった。信じられないという表情で、長い間私を見つめていた。

「ジュリエット、どうしてここにいるんだい？」

ヒゲだらけの顔を押し付けてくるものだから、くすぐったくて返事もできなかつた。艦長の帽子が落ち、はげた頭がむき出しになった。船員たちも気づいて、まわりに集まり始めていた。その中の一人が気をきかせて、呼びにいつてくれたのだらう。ハッチから飛び出すようにして、姉が姿を見せた。

「ジュリエット、ジュリエット！」

船員たちを押しつけ、姉は艦長の手から私を奪い取った。息がでないほど強く私を抱きしめた。

子供っぽいと言われるかもしれないが、ブランコに乗ることが私はとても好きになった。父に頼んで、庭に一つ作ってもらったほどだ。大きなリンゴの木があり、その枝からロープでつり下げたのである。

一人になると、私はいつもそれに腰かける。考えごとをしながら、ゆっくりと時間を過ごすためだ。ロープと枝がこすれあう音を聞きながら目を閉じると、まるであの塔の中にいるような気持ちになる。塔の内部でつねに耳にしていた音。クリスが「塔が歌っている」と表現していた音が耳の底によみがえってくるのだ。

私たちが救出された後、塔にはもちろん調査隊が派遣された。考古学者も含むかなり大規模なものだったらしいが、驚くべきことにそのときにはもう何も残っていなかったらしい。氷に開いた巨大な穴は見つけることができたが、塔は影も形もなかったのだ。いつの間にか沈み、氷の下へ姿を消してしまっていた。

すぐに潜水夫が呼ばれ、氷の下の調査がされたが、そこにも何も見つけることはできなかった。つまり塔は、海底に沈没してしまっただけではないのだ。ふわふわとただよいながら、氷の下を再びどこかへ行ってしまったのだ。

あの塔はそうやって、何世紀も旅を続けてきたのだろう。クリスと私は、その長い旅の途中、ほんの一瞬をあそこで過ごしただけの客に過ぎないのだろう。

## 氷の海

調査隊は、氷の上に残されていたポールを持ち帰ることしかできなかった。これについてはいろいろと調査が行われたらしいが、大

した結果は得られなかったらしい。『クリスのボール』と呼ばれ、今でも博物館へ行くと見ることが出来る。

そういえばクリスのことだ。私はクリスを北極の基地に残してきた。その後もずっと待っていたのだが、2週間たっても3週間たっても連絡はなかった。しびれを切らし、私は空軍に問い合わせしてみた。

返ってきた答えは、私をひどく驚かせた。私のあとを追うようにして、数日後クリスも北極を離れ、イギリスへ向かったのだが、そのあとどこへ行ったのかは誰も知らないのだった。飛行機に乗せられ、イギリスの空港に着いたのはたしかだったが。

空軍の人々は、しばらくの間滞在できる場所を用意してやろうとしたらしいが、クリスは断り、徒歩で町の中へ姿を消した。近くの町に親戚の一族があり、そこをたずねると言っていたらしいが、親戚の姓も町の名も誰も聞いてはいなかった。塔と同じように、クリスも行方不明になってしまったのだ。

空軍の調査官は、もう一つニュースを知らせてくれた。クリスが話していた三十年前の北極探検隊のことだ。いくら調べても、そんなものは存在しないのだそうだった。

納得できず、調査官自身が何度も調べなおしたらしい。イギリスだけではなく、外国にも対象を広げたが、結果は同じだった。30年前であろうがいつであろうが、イギリスであろうがこの国であろうが、飛行船を使った探検隊を北極へ送り出したことなどないということが確かめられただけだった。

ブランコに座り、枝のきしみに耳を傾けながら、私は考え続ける。

あの塔に住んでいたのがどんな人々だったのか、どんな肌の色をしていたのかは、もちろんわからない。ある規模の建物を建造できる人々ではあったのだろう。だが必要以上に感心することはない。何世紀も昔には、高さが百メートルを越える樹木など珍しくはなかっただろう。それを何本かつなぎ合わせるだけで、塔の大黒柱はもう完成してしまう。あとはそれを6組並べ、床を張り、部屋を付け足してゆくだけだ。

もちろん、北極に近い海で暮らす人々であつたのだろう。それがある日、大津波におそわれ、陸地にあつた家ごと、港につながれていた船ごと、背後の森林に生えていた木々ごと押し流され、氷の下へ押し込まれてしまったのだろう。だが同時に、かなりの量の空気も氷の下に閉じ込められることになった。人々は何とか生き延び、自分たちの手で町を作って暮らし続けたのだ。

その人々がどこへ行ってしまったのかも、もちろんわからない。いつか地上へ戻ることができる日を夢見て、生き続けたのかもしれない。その夢はかなえられたのだろうか。あの町が無人になったのは、みなが地上へ戻ってしまったからなのだろうか。

それとも人々は、あそこで死んでいったのだろうか。最後の一人が死に、塔は無人のまま忘れ去られるにいたつたのだろうか。あるいは氷の下で何世代にもわたって生き続け、子孫たちは、自分たちは氷の下に閉じ込められているのだという事実さえ忘れてしまったかもしれない。あの町を世界のすべてであると考え、それなりに幸せな日々をすごしたのかもしれない。

だがそれも、今となっては知りようのないことだ。

目を閉じると、私は塔の姿をはっきりと思い浮かべることができ  
る。今もきしみ、さんざめき、あの歌を口ずさみながら、氷の下の  
旅を続けていることだろう。

どこから来たのか、どこへ行くのかは誰も知らない。何世紀も前  
からそうしているのだろうし、きっとこの世が終わるときまで、誰  
にも見つけられることなく氷の下に存在し続けるのだろう。クリス  
と私は、信じられないような幸運でたまたま出会うことができただ  
けなのだろう。白夜が輝く海の下で、あの塔は私たちの誰よりも長  
く生き続けるのだ。

(終)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9762c/>

---

氷の海

2008年9月30日17時31分発行